



Title	外国人が観た明治初期の能楽
Author(s)	スラボフ, ペトコ
Citation	日本語・日本文化研究. 2013, 23, p. 60-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26917
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

外国人が観た明治初期の能楽

スラボフ・ペトコ

序文

明治時代は能楽にとって浮き沈みの多い転換期であった。能は、江戸時代に將軍家の最賈を受け、式楽になったため、一般庶民との触れ合いが極めて薄くなった。明治維新の行政改革とともにその能楽最賈が断たれ、大和猿楽四座一流の一般の能役者だけではなく、大夫も困難に陥り、廃業をした人が多い。しかし、太政大臣だった岩倉具視は、欧米使節の間（1871～1873）、ヨーロッパでオペラを観察し、外国高官に見せるべき国劇が日本にも必要だと判断し、能楽振興を決めた。岩倉は、1870年代に天皇家の興味を能へ向かわせ、自宅の舞台で演能を催し、能舞台の建設も促進していたため、能楽復興では大事な役割を果たした。¹

この明治初期は、西洋による日本文化発見の多い時期でもあり、1860-70年代から日本は次第に、海外の新聞雑誌、エッセイや大衆文学の人気のある話題になった。この時期は、日本文化と欧米文化の活発な付き合いの始まりといえるが、西洋の興味はまだ広くて浅く、能楽に専念した研究は僅かであり、舞台芸能としての紹介もとても断片的であった。能楽が海外であまり知られなかったもう一つの理由は、明治初期において能楽が届きがたい存在であったことである。便宜のため、本稿は明治初期の境界を明治14年とするが、その分け方は明治の能楽史の枠組みに基づいている。明治14年は、日本初の能楽堂、通称「芝能楽堂」の落成の年である。この能楽堂は能楽上演の新しい形態を創造しただけではなく、能楽の上演空間を西洋の劇場空間に近づけ、能を外国人に届きやすい存在にしたのである。上層階級や外国の賓客の社交施設だった紅葉館に所属していた芝能楽堂は、明治中期に様々な旅行記やガイドブックに名が挙げられ、能楽を外国人に紹介するための重要な施設であった。芝能楽堂以前、東京の公開能舞台はただ二つ、飯倉町の金剛舞台と浅草南元町の梅若能舞台であり、人気があった華やかな猿若町から離れており、あまり外国人の目に入らなかった。外国人の研究家や訪問者が日本の演劇を雑多に紹介する試みがあった²が、ケンペルやツンベルクの古い手記を参照したり、芝居町の歌舞伎を中心にしたりして、能楽に触れることはめったにない。本稿の目的は、能楽界がまだ混乱の状態だった、芝能楽堂が落成する前の時代に、能が外国人の前でどのように上演され、どのように把握されたかを紹介することである。本稿は当時の文献をもとにするが、それは概して二種類、つまり和文献と外語文献に分かれる。和文献は明治初期の新聞雑誌の記事であり、それは梅若実の日記で補われている。外語文献は単行本と新聞雑誌に分かれ、単行本は日本の図書館や海外の電子アーカイブでアクセスできる1860年から1881年までの欧米版の日本関係の英語・フランス語・ドイツ語の文献であり、新聞雑誌は米国・イギリス・フランス・

ドイツ版の人気新聞雑誌（イギリス：「The Cornhill Magazine」「The Contemporary Review」；米国：「The Atlantic Monthly」「The Galaxy」「The New York Times」；フランス：「Le Figaro」「Le Temps」；ドイツ：「Die Gartenlaube」など）である。

1 和文献に見える能楽と外国人 - 能楽が外交の手立てに

岩倉具視による能楽振興計画以前から、能は欧米の高官貴族の歓迎に際して、文化資源として外交に必須の手立てとなっていた。1869年（明治二年）8月29日に、英国王子のアルフレード（エジンバラ公）が世界周遊の途中日本を訪れた。ヨーロッパ王族の訪問としては、これが日本において初めてのことであり、国賓として歓迎され、相撲・日本舞踊・手品などと並んで能も紹介された。梅若実の日記に「四ツ谷御門外紀州様上屋敷ニ而イギリス国王王子饗応之御能。」（梅若実 2002a：p.236）とあり、能は『弓八幡』『経政』『羽衣』と『小鍛冶』、狂言は『墨塗』『太刀奪』であった。また「弓八幡半能。経政初同より直ニ切ニナル。羽衣前ノ方ナシ。舞モナシ。小鍛冶半能。」（梅若実 2002b：p.272）とあるので、饗応でアルフレードのために上演された番組はかなり省略された能から構成され、2時間ぐらいの演能であった。

1872年（明治五年）にロシアのアレクセイ・アレクサンドロヴィチ公も日本を訪問し、浜御殿延遼館で観能した。十月二十日の『日日新聞』に「ロシア人饗応として浜御殿に於て能被仰付、日限は追て御達の旨。（中略）番組 春日龍神（宝生九郎）、石橋（観世鉄之丞）、舟弁慶（中村平蔵）」（倉田喜弘 1994a：p.37）という予告が見られる。梅若実の日記に「於御浜御殿延遼館御舞台魯国親王御饗応御能被仰付。九字揃。十二字ニ始リ二字ニ相済。（中略）当日御急ニ付三番共半能ニ相成。」（梅若実 2002a：pp.401-402）とあるので、これも省略された番組で2時間ぐらいのものだった。

その翌年（1873年）にまた賓客が訪日した。イタリアのジェノヴァ公のために延遼館で日本の伝統芸能が上演された。九月の『新聞雑誌』に「伊太利皇族『プリンス・ジュツク・ド・ジェーブ』氏、本月一日入京、即日参朝。（中略）延遼館滞在中、饗応トシテ府下有名ナル芸人等ニ命アリテ日本ノ諸芸能ヲ一観ニ供セラレ、其他一切ノ待遇ハ先般魯国公子ニ準ゼリト云」（倉田喜弘 1994a：p.42）とあり、梅若実日記にその饗応能に関する項目があり、番組は能『大蛇』『夜討曾我』『舟弁慶』、狂言は『鼻取相撲』と『素袍落』だったが、ここも能はみな半能だった（梅若実 2002b：p.32を参照）。

1879年（明治十二年）6月にドイツ皇孫も訪日中に能を観た。この演能は根岸の前田齊泰の邸宅³で行われ、能は『橋弁慶』『望月』『吉野静』、狂言は『墨塗』『子盗人』だった。『喜楽の友』五号に「本月七日、根岸の前田家へ独逸皇孫殿下を御招待有て三番半能を御覧に入、（中略）皇孫殿下はけづんな御顔付でありしが、正三位殿は頻と舞れ度御様子で後の所に立て居られた故、役者達が内々おかしがりて居た由。」（倉田喜弘 1994a：p.122）とあり、以前と同様、番組はみな半能であった。

同年(1879年)七月に米国前大統領のユリシス・グラントも岩倉具視の邸宅で饗応能を觀賞し、その感動が国内の能楽振興に影響を与えたと考えられる。この出来事は、新聞でも伺えるが、梅若実日記にも当日の番組が見られ、半能『望月』、狂言『釣狐』、能『土蜘蛛』が上演されたようである。仕舞も『花筐』、『七騎落』、『鞍馬天狗』など8曲もあったようである(梅若実 2002b:p.272 を参照)。

以上、明治初期に賓客のために上演された能楽の仕立ての特徴がよく見えている。これらの饗応能の総ては半能か省略の形であり、上演時間が伺える記事から判断すると、2時間を過ぎないものだった。その半能は、問答のない、舞いや動きの多い曲ばかりである。能楽は饗宴の余興として紹介されており、視覚・聴覚の要素が中心とされていたことがわかる。明治政府の意図は、賓客を楽しませると同時に、能楽を上層階級の芸能として、欧米に認めてもらうことであった。しかし、グラント前大統領が能に対して興味を表した件⁴以外、観能に関して外国の賓客が感動した記述が見当たらないため、外国の貴族にとっては能楽が印象的ではなかったといえよう。

そのような無関心は、舞台芸能に対する欧米的な把握に原因があると考えられる。欧米では、19世紀の前半から、余興と芸術の区別が明確になり、クラシック音楽とポピュラー音楽を同じ舞台上で上演する稀な例を除いて、文化における上級下級の識別があった。クラシック文化(オペラや正劇⁵など)は上層階級、ポピュラー文化(ミュージックホールなど)は下・中層階級のものであった(Dimaggio 1982 を参照)。1850年代から人気になった下・中層階級向けのミュージックホールでは、食事と余興が同一空間で行われていた。19世紀後半に欧米では劇場内のマナーが確立し、作法書では「座席に座って最後まで動いたりしない」、「幕が上がっている間は、注意をもつばら舞台へ向け、下りている間は同伴者に向ける」、「飲食物は劇場の外で取る」などのような注意が見えており、特に上層階級が集まる劇場ではこれらが厳しく守られ、飲食は劇場のビュッフェかバーでとっていた(Wells 1857、Frost 1869、Lunettes 1858)。

明治政府は賓客に饗宴の余興の形で能楽を紹介したが、貴族の賓客から好意的な反応はなかった。それは、注目すべきドラマではなく、ミュージックホールで見えるような軽い意味の舞踊や音楽コンサートとして把握されていたためであると考えられる。能を好意的に受け入れたのは、貴族ではなく、庶民出身の陸軍将校であったグラント前大統領のみである。

2 外語文献に見える能楽

ヨーロッパの貴族は能楽に対して好意的であったといえないものの、外国人が能に気づかなかつたわけではない。明治初期、能楽にはじめて興味を示したのはイギリスの外交官・御雇外国人だった。

2.1 イギリス人の先駆者

(a) アルジャーノン・ミットフォード (Algernon Mitford)

1869年の英国王子のための能楽を第1節で紹介したが、この演能を巡って英国側からも準備があった。当時英国公使館の二等書記官だったアルジャーノン・ミットフォードが英文のあらすじを用意し、彼の回想記(1915年版)に「このような公演を外国人が見るのは初めてであった。(中略)私は学者の助けを借りて、各演目についての梗概を用意した。」(A. B. ミットフォード 1998: pp.242-243)とある。

その2年後(1871年)、ミットフォードは『昔の日本の物語』(Tales of Old Japan)を著し、付録に能公演の説明を書いた。この『昔の日本の物語』は非常に広く流布し⁶、海外で初めて能を紹介した文献となった。ミットフォードは能を「古代オペラ」と名付けて、最初にその起源説を紹介し、不正確ながらも五番立ての内の脇・修羅・鬘をだけ紹介して、能面を古代ギリシア演劇で使われた仮面に例えて能の説明をし、準備した『弓八幡』『経政』『羽衣』と『小鍛冶』の梗概も載せている。

詩歌の美しさが、舞台背景の欠乏や醜い装束と化粧によって損なわれる。例を挙げると、『羽衣』には、天女が恐ろしい面をつけており、緋色のふさがついた鬘をかぶっている。羽衣自体が完全に想像力に任せられ、天の舞いは不気味な叫びや悲鳴に伴われた回転や足踏みや跳躍の連鎖である。姿を消すことも、踊るダービッシュの動きのような旋回に象徴される。レチタチーボの吟唱が不自然で、よい教育を受けた日本人でさえ、曲に前もって精通していない限り、筋がわかるはずがないほど理解しづらいものである。(Mitford 1871: pp.163-164 筆者訳)

ミットフォードの評価には風刺が多い。ヴィクトリア女王のイギリスでは、ドラマが栄えて、舞台上は(劇内人物が身分を隠す場合を除いて)、すでに仮面ではなく化粧を使っていた。さらに、写実主義へ向かっていたイギリスのドラマでは、シェイクスピアなどの古典演劇を上演する場合も、表現方法と演出は現代的であった(詳しくは Nicoll 1963: pp.200-235; Nicoll 1936: pp.141-170 を参照)。能の文学面を賛美しながら、その古典的表現方法を見て、ミットフォードはイギリス人として優越感を抱くしかなかった。しかし、狂言の軽さを気に入る、「能の古典的な深刻さが、曲の間に紹介される「狂言」という軽い喜劇に和らげられる。(中略)この喜劇は鬘や面をつけずに上演され、対話が口語で行われ、音楽の伴奏がないため、それがやや容易に理解できる。」(Mitford 1871: p.164 筆者訳)とある。

(b) アーネスト・サトウ (Ernest Satow)

ミットフォードは明治期において、能についての最初の記録を残し、それが広く知られるようになったが、実際は彼は能を見た最初の外国人ではなかった。アーネスト・サトウは1862年に来日して日本文化を研究し、日本学の開祖の一人となった。サトウはミットフォードより一年早く、1868年(明治元年)に、飯倉町の金剛舞台で能楽を見たが、日記が1921年に刊行されるまで知られていなかったため、能研究に影響を与えられなかった。サトウが見た能は『鉢木』、狂言は『伯母酒』と『末広』だった。ミットフォードの評価に比べると、サトウには優越感がなく、能をできるだけ客観的に描こうとしており、個人的な評価が見られない。

外国人がこういう種類の演劇を見に行ったのは、これが初めてのことであった。能は一種の悲劇あるいは史劇であり、狂言は茶番劇である。(中略) 私が一番おもしろいと思った狂言は、末広であった。(中略) 能の方はわからなかったが、隣席の日本婦人から本を借りて文句をたどりながら、ようやく理解することができた。これは鉢ノ木であった。(中略) その当時は、金剛大夫のほかに、観世大夫、宝生大夫、金春大夫という三人の能役者がいた。観客は侍階級の者ばかりだった。(アーネスト・サトウ 1960: pp.232-234)

(c) エドワード・リード (Edward Reed)

サー・エドワード・ジェームス・リードが海軍創立の途中だった明治政府の招待で、1879年(明治十二年)に造船専門家として訪日した。リードは日本にいたく魅了され、その結果翌1880年にエッセイ『日本：その歴史、伝統と宗教』を出版した。リードは博識な人であり、宗教や美術など日本文化の現象を色濃く描写することができた。日本の古典文学の説明に、W. G. アストン訳の謡曲の一部を引用しており、その中に能が「a short dramatic sketch」、つまり「寸劇」として紹介されている。謡曲の名は挙げられていないが、文の流れから『白楽天』の道行きだと考えられる。

リードは2回演能に誘われ、1879年3月23日に渡辺大坂府知事の邸宅(『郵便報知新聞』)、26日に京都東本願寺の枳殻邸(『東京日日新聞』)で、饗応能楽を観た。『日本：その歴史、伝統と宗教』にある能の記述は、その後者の感想である。

舞踊と呼ばれるが、舞踊の意味を超えている音楽や劇的な催しが、日本で最も卓越した階級に属する役者によって、食事中上演された。衣裳の壮麗さと驚異に伴われ、不思議ながら、明確に見事な歌唱や音楽、または役者のパントマイム風の動きが面白く、盃やお箸での自分のパフォーマンスよりも、舞台の方にたびたび注意が向かった(中略)。精通の読者がいるかもしれないので、上演された所謂舞踊を列

挙する - 1. 望月、2. 石神、3. 墨塗、4. 土蜘蛛、5. 靱猿。自分の目にはこれらが見覚えのない様子だったことを白状するしかないが、読者の中には、日本の韻文にもっと精通している方もいるでしょう。(Reed 1880:pp.202-203 筆者訳)

饗宴で催されたこと、曲数が能狂言合わせて五つもあり、引用は略したが座敷手品もあったことからすると、能は省略した形で上演されたと考えられ、第1節で紹介した外国賓客のために仕立てられた能番組と同じパターンである。リードはその劇的な価値を見落とさず「舞踊の意味を超えている音楽や劇的な催し」と名付けているが、能を「舞踊」として把握することは、これ以降明治中期からは外国人の間で徐々に広がったようである。

(d) バジル・チェンバレーン (Basil Hall Chamberlain)

明治初期に能楽に注を向けたのはもっぱらイギリス人であった。サトウ、ミットフォードとリードの興味は途絶えたようだが、もう一人、バジル・チェンバレーンは能楽研究に時間をかけて、英語訳もおにない、最初の外国人能楽研究家とよばれることとなった。

チェンバレーンは、1873年(明治六年)に御雇外国人として来日し、最初から日本の古典文学に興味を示した。古典文学を通じて、能狂言にも出会った。彼の能をテーマにした最初の記事は、1876年(明治九年)にイギリスの一流文学雑誌だった『ザ・コーンヒル・マガジン』(The Cornhill Magazine)に掲載され、広く知られるようになった。その記事は「ザ・デス・ストーン：日本人のリリックドラマ」と題され、舞台芸能としての能楽の説明と能『殺生石』の英訳から構成される。チェンバレーンは飯倉町の能舞台を紹介し、「観光客が到着した所は、普段劇場と呼ばれるが、実際は劇場ではない。(中略)能舞台である - 芸能の中で最も尊ばれた中世の叙情詩劇が上演される場所である。その観客もほとんど上流階級である。」(Chamberlain 1876:p.479 筆者訳)と最初から庶民にはわかりづらい上層階級の芸能として能を描写している。この記事は翌年、つまり1877年2月24日に、『殺生石』英訳抜きの形で米国の『ニューヨーク・タイムズ』にも掲載され、多くのアメリカ人に能楽の存在を知らせた。

チェンバレーンは能楽の文学性と古典の威厳を賛美しているが、囃子を気に入らず、ヨーロッパの優越を唱えざるを得なかった。

ところが、音楽には同じように賞賛の言葉を述べられない。西洋の偉大な作曲家の神秘的なハーモニーを聞き慣れた耳には、拷問にかけんばかりの体験である。この忌まわしいかき鳴らしや猫の鳴き声のような音がたくさんあるが、幸いにこれは主に間奏や舞踊の伴奏として演奏される。その間、ヨーロッパの観客が多分、舞台上の出来事よりも、その注意をお箸の方に向ける気になるので、合唱隊の謡を味わ

うことを邪魔しないだろう。(Chamberlain 1876:p.481 筆者訳)

しかし、チェンバレーンが熱心な能愛好者だったことは、イサベラ・バード(Isabella Bird)という19世紀後半の冒険者かつ著述家の日本旅行記『人跡未踏の日本の小道』からもわかる。1878年(明治十一年)に改築された新富座の新開場式で上演された『石橋』に関して「コーンヒル・マガジンで1876年10月号の、この芸能をテーマにした記事の筆者であるチェンバレーンさんが、この古代叙情詩劇に対して私に関心を持たせようとした。しかし、彼の説明や衣裳の美しさ、そして役者の古典的な威厳にもかかわらず、非常に退屈に思った。そのかき鳴らし、猫の鳴き声のような叫び、そして伝統的な姿勢に伴われる足踏みが、よそ者を全く立腹させるのである。」(Bird 1881:p.63 筆者訳)

チェンバレーンは日本アジア協会報の頻繁な投稿者だった。1877年(明治十年)の会報の「日本詩歌に見える掛詞と枕詞の使用について」(Chamberlain 1877:p.87)では謡曲の文学的な特徴を中心に述べている。翌年の会報に、狂言を中心とした「滑稽劇の中世口語について」と題された記事がある。

1880年にチェンバレーンは最初の翻訳集『日本人の古典詩歌』(B・H・チェンバレン 1987)を刊行した。能の『羽衣』『殺生石』『邯鄲』と『仲光』、狂言の『骨皮』と『座禅』の英訳が載っている。能楽の説明は、『ザ・コーンヒル・マガジン』の繰り返しが多いが、能に対する態度の変化が見え、ヨーロッパの演劇との比較も見える。まず、能の歴史では、日本の舞台の発展を「叙情」から「演劇」への動きとして紹介している。叙情の多い、舞台装置や動きの少ない能が初期、舞台装置や動きの多い能が後期に現れたと主張し、後者を否定的に描写している。チェンバレーンは能の古典的威厳、舞台の殺風景さを好意的に描写しているが、「ところが残念なことにも伴奏される音楽には同じように賞賛の言葉を述べられない。各曲の終わりの頃に、主役が舞う舞は、西洋の観客にとっては退屈でつまらない。」(B・H・チェンバレン 1987:pp.38-39)という意見で能の説明を締めくくる。

1891年にチェンバレーンは能を中心にした記事を、『日本事物誌』に載せた。以前の記述の繰り返しが多いが、前よりはっきりしたギリシャ劇との比較が目立ち、ヨーロッパ演劇論の三一致⁷の適用も見えている。

2.2 ドイツとフランスに伝わった能のイメージ

ミットフォードの『昔の日本の物語』は早く注目を集め、1875年にドイツ語に翻訳されたが、その影響はドイツ語翻訳以前にも見える。ドイツ人のエフエミア・フォン・クドリャフスキ(Euphemia Von Kudriaffsky)が、1874年のエッセイ『日本についての四講義』の中で日本演劇を紹介している。クドリャフスキは日本を訪問したことがなく、その講義は日本文化に関する文献のまとめと、1873年のウィーン万国博覧会の日本館で見た

ことから構成される。能の説明にはミットフォードの言葉を自分の意見として紹介していることが多い。ミットフォードの『羽衣』の説明も引き、その後「在ウィーンの日本大使の官邸で催された楽劇の中に、この話が特殊な歌を詠唱する歌い手によって語られ、もう一人が全体の場面を無言舞踊で表現しようとしていた。最後は、用意されていた花瓶から花を出し、その扇に置いて、それを観客の前に散らせた。」(Kudriaffsky 1874:pp.90-91 筆者訳)と「能」の舞を描写しているが、その舞の様子は日本舞踊を思わせ、クドリャフスキがそれを能の仕舞と混同した可能性が高い。

フランスの新聞雑誌には、日本の舞台芸能に関する記述が見当たらないが、ミットフォードのおかげで能楽のことが知られるようになった。フランス人のアレキサンダー・クラウス (Alexander Kraus) が『日本の音楽』(Kraus 1879:pp.22-23) というエッセイで、出典を提示せずにミットフォードの説明を参照している。『昔の日本の物語』を参考にしたことはその誤解 (五番立の内三番しか挙げられていない) からわかるし、また能の歴史や面の説明はミットフォードとほぼ同じである。しかし、実際の体験を描写していないためか、クラウスはミットフォードより個人評価のない説明を残した。

注目すべき同年出版のもう一つの文献は、フレデリック・リョブランク・ジュ・ベルネ (Frederic LeBlanc du Vernet) 著であると考えられる、匿名の『芸術と文学の日本』である。作者の経歴が不詳であり、日本文学史などに誤解が多少あるが、1878 年のパリ万国博覧会でジャポニズムがますます広がったフランスでは、人気のあった文献であったと考えられる。日本の舞台芸能の章は歌舞伎に集中するが、能楽の説明もある。

「能」というものは、神秘劇に類して、オペラやバレエに似た長い詩的な叙唱である。宗教的な教えが多く、それは合唱によって唱えられる間、役者が律動的な踊りを舞いながら、神秘的でわかりにくい概念や筋を解説している。オーケストラは、断続的ながら魅力のある強烈な嘆声、巨大な悲嘆のような憂鬱なうめき声を上げ、それは説明できないほど夢中にさせるもので、重々しい聖なるオラトリオに聞こえる。「能」は、他の聖なる舞踊と音楽と同じように、不可解ながらも見る人を感動させる芸能である。概して、最も客観的な芸能である音楽が引き出そうとする感情の普遍性は、[能の] 音楽に強調されている。瞑想や無関心の美的な平静を最もよく表現する芸能である。この「能」は、大名の屋敷で上演され、壮麗なる大名とともに姿を消し、現在は帝の「内裏」でしか見られない芸能である。(Anonyme 1879:pp.45-46 筆者訳)

筆者が実際に能を観察したような描写のようであるが、そうであるとすれば、どのような状況で観能したかということは、文中に伺えない。また、そうではないとしても、これまで紹介した文献に似たような描写は見えない。不明な点の多い記述であるが、能の客観

的な描写ではなく、能から受けた印象を中心とし、当時パリで繁盛していた印象派的なアプローチで、当時の能楽に関する記述の中で、独特なものである。

5 結び

この明治初期に能楽との出会いを海外に伝えたのはもっぱらイギリス人であった。チェンバレンは能研究で非常に有名であり、その記述はバードに参照され、米国とイギリスの雑誌、つまり英語を母語とする国で掲載された。しかし、最もよく参照されたのはミットフォードの『昔の日本の物語』であり、その影響はイギリスだけではなく、ドイツやフランスにまで及んでいる。しかし、明治初期に実際に能楽に触れた外国人は極めて少ない。外国の貴族のために上演された能楽は、饗宴の余興として紹介され、半能か省略した形で舞や動きの多い部分が上演されていた。したがって、外国人のために、わかりづらいところを省略して、能楽を視覚・聴覚的に面白く見せようという傾向が、明治初期からすでにあったことがわかる。明治政府の目的は、まずそれを以て賓客を楽しく饗応することであろうが、外国のエリートに能を貴族芸能として認めてもらい、新生日本でその存在を保証することも、第二の目的であったと考えられる。しかし、ヨーロッパ舞台芸能の作法に対応できなかったためか、賓客の関心を引くことができなかった。さらに、能が省略され、舞や動きの多い部分しか残されていながら紹介されたため、海外に伝わった能のイメージは正確だったといえない。饗応能楽を観たミットフォードとリードの記述には「古代オペラ」、「寸劇」、「舞踊」という語が見えるが、二人とも能の劇的要素に気づいたにも関わらず、その言葉遣いは当時の外国人向けの能楽の有様を表している。後の時代、明治中後期に、「能の舞」という言葉が広く使われるようになるが、これも以上のような外国人向けの能楽の影響であろうと考えられる。

参考文献

和文

- 梅若実（著）；梅若実日記刊行会編（2002a）『梅若実日記』第2巻、八木書店
梅若実（著）；梅若実日記刊行会編（2002b）『梅若実日記』第3巻、八木書店
表章；天野文雄（1987）『岩波講座 能・狂言Ⅰ 能楽の歴史』岩波書店
久米邦武（1911）「能楽の過去と将来」『能楽』、9（7）
倉田喜弘（編）（1994a）『明治の能楽』第1巻、日本芸術文化振興会
倉田喜弘（編）（1994b）『明治の能楽』第2巻、日本芸術文化振興会
A. B. ミットフォード著；長岡祥三訳（1998）『英国外交官の見た幕末維新』講談社
アーネスト・サトウ著；坂田精一訳（1960）『一外交官の見た明治維新』岩波書店
B・H・チェンバレン著；川村ハツエ訳（1987）『日本人の古典詩歌』七月堂
B・H・チェンバレン著；高梨健吉訳（1969）『日本事物誌』第2巻、平凡社

欧文

- Anonyme (1879). " *Le Japon artistique et littéraire* ". Paris.
- Bird, Isabella L. (1881) *Unbeaten tracks in Japan : an account of travels on horseback in the interior*. Vol.1. New York.
- Chamberlain, Basil Hall. (1876) " The Death Stone: a Lyric Drama from the Japanese ". *The Cornhill Magazine*, Vol.34. London. pp. 479-488
- Chamberlain, Basil Hall. (1877) " On the Use of Pillow Words and Plays upon Words in Japanese Poetry ". *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol.5, part 1. Yokohama. pp. 79-88
- Chamberlain, Basil Hall. (1878) " On the Mediaeval Colloquial Dialect of the Comedies ". *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol.6, part 3. Yokohama. pp. 357-396
- Chamberlain, Basil Hall. (1880) *The Classical Poetry of the Japanese*. London.
- Chamberlain, Basil Hall. (1891) *Things Japanese*. London.
- Dimaggio, Paul. (1982) "Cultural entrepreneurship in nineteenth-century Boston". *Media, Culture & Society*. January. pp. 33-50
- Frost, S. A. (1869) *Frost's Laws and By-Laws of American Society*. New York.
- Kraus, Alexandre. (1879) *La musique au Japon*. Florence.
- Kudriaffsky, Eufemia von. (1874) *JAPAN vier Vorträge*. Wien.
- Lunettes, Henry. (1858) *The American Gentleman's Guide to Politeness and Fashion*. New York.
- Mitford, A. B. (1871) *Tales of Old Japan*, Vol. 1. London.
- Nicoll, Allardyce. (1963) *British Drama*. New York.
- Nicoll, Allardyce. (1936) *The English Theatre*. London.
- Reed, Sir Edward James. (1880) *Japan: Its History, Traditions and Religions*. Vol.2. London.
- Shinko, Kagaya. (2005) "The First Umewaka Minoru and Performances for Guests from Overseas". *NOAG* 177-178. Hamburg. pp. 225-236
- Wells, Samuel Roberts. (1857) *How to Behave : a pocket manual of etiquette, and guide to correct personal habits*. London

¹ 明治の能楽史は 表章 ; 天野文雄 (1987) 『岩波講座 能・狂言 I 能楽の歴史』

「能楽史概説 (七) 能楽前期—近代の能楽」 (岩波書店、東京) に詳しい。

² 例えば : J. L. Klein (1866). *Geschichte des Drama's III*. Leipzig

³ 旧加賀藩主、かつ能愛好者の前田斉泰は 1875 年 (明治八年) に根岸金杉村の別邸で能舞台を建てた。現在横浜能楽堂の能舞台である。

⁴ グラントによる能楽の絶賛は岩倉具視に能楽振興の計画を裏付けたと言われる。詳しくは 古川久 (1969) 『明治能楽史序説』 (わんや書店) を参照。

-
- ⁵ イギリスでは演劇は「正劇」と「不正劇」と二つに分かれ、正劇は検閲される真面目な演劇で上層階級のもの、不正劇は検閲されないメロドラマやコメディなどを含む中下級のものであった。
- ⁶ 例を挙げると：W. G. Aston の『日本文学史』、B. H. Chamberlain の『日本事物誌』や W. Griffis の『日本の信仰』をはじめ、『昔の日本の物語』は 19 世紀後半、20 世紀前半によく引用または参照された文献であることが見える。
- ⁷ 時・場・筋の三つの一致。アリストテレスの『詩学』に定義され、それはヨーロッパのドラマで広く使用された法則である。